

第28回大学博物館等協議会・第20回日本博物科学会
大会プログラム・発表要旨集



2025年6月19日（木）・20日（金）

会場：九州大学箱崎サテライト

旧工学部本館3階（第一会議室・10番講義室）

大学博物館等協議会2025年度大会・第20回日本博物科学会実行委員会

九州大学総合研究博物館

ご挨拶

第28回大学博物館等協議会・第20回日本博物科学会の開催にあたって

九州大学総合研究博物館 館長
堀 賀 貴

このたび、第28回大学博物館等協議会ならびに第20回日本博物科学会を、ここ九州大学で開催できますことを大変光栄に存じます。全国から多くの博物館関係者・研究者の皆様を福岡の地にお迎えできることを、心より歓迎申し上げます。

今年のシンポジウムでは、「大学博物館収蔵再考—新たな段階にむけて—」というテーマのもと、収蔵資料のあり方そのものを見つめ直す機会といたしました。大学博物館は、学術資料を収集・保管することによって教育・研究を支えてきましたが、その意義と運用方法は時代とともに変化しています。スペースや管理コストの問題、資料のデジタル化、教育利用の多様化、さらには分析手法の高度化・多様化といった課題の中で、これからの収蔵活動は何を目指し、どうあるべきか。今回のシンポジウムでは、こうした根本的な問いに立ち返り、実践と理念の両面から議論を深めていきたいと考えています。パネルディスカッションでは、とくに今後の課題について議論する予定ですので、多くのご意見をお寄せください。

九州大学総合研究博物館では、自然科学・人文科学を横断する幅広い学術資料の収集と活用を進めております。また、当館本館の建物は1930年に建設された九州大学の象徴的建築であり、その文化的価値が認められ、2023年には登録有形文化財として認定されました。この機会に、展示とあわせて建築の魅力もご覧いただければ幸いです。

福岡は、歴史と文化、そして豊かな食に恵まれた街です。どうぞ短い滞在ではございますが、会議の合間に福岡の魅力にも触れていただき、有意義なご滞在となることを願っております。最後に、本協議会および博物科学会が、皆様にとって有意義な議論と交流の場となることを心より祈念し、開催にあたってのご挨拶とさせていただきます。

2025年度幹事校

会長校： 北海道大学総合博物館
副会長校： 東北大学総合学術博物館
監査校： 九州大学総合研究博物館

第28回大学博物館等協議会・第20回日本博物科学会

大会プログラム

2025年6月19日（木）・20日（金）

九州大学箱崎サテライト（九州大学総合研究博物館）

会場：旧工学部本館 3階

A会場（第一会議室）・B会場（10番講義室：館長会議・理事会のみ）

【1日目：6月19日（木）大学博物館等協議会】

12:00 受付開始（九州大学箱崎サテライト旧工学部本館 入口）

13:00 開催挨拶（A会場：3階第一会議室）

会長校 挨拶：大学博物館等協議会会長 坪田 敏男（北海道大学総合博物館 館長）

開催校 挨拶：大会実行委員長 堀 賀貴（九州大学総合研究博物館 館長）

13:05 祝辞（ビデオレター）

九州大学総長 石橋 達朗

<< シンポジウム >>

「大学博物館収蔵再考 ―新たな段階にむけて―」

• **13:10** 趣旨説明：三島美佐子（九州大学総合研究博物館）

• **13:13** 伊藤 泰弘（九州大学総合研究博物館）

「収蔵学術標本 ―理想と現実―」（発表15分・質疑2分）

• **13:30** 佐々木 猛智（東京大学総合研究博物館）

「博物館標本の分散収蔵とデジタルアーカイブ」（発表20分・質疑5分：以下同様）

• **13:50–14:00** 休憩（10分）

• **14:00** 小林 快次（北海道大学総合博物館）

「収蔵標本の資源化」

• **14:25** 栗原 祐司（国立科学博物館）

「博物館の収蔵問題に関する国際的動向と役割」

14:50-15:00 休憩 (10分)

- 15:00 パネルディスカッション (30分)

ファシリテーター: 三島 美佐子 (九州大学総合研究博物館)

- 15:30 閉会・アナウンス

15:40 ポスター発表コアタイム・館長会議 (30分)

ポスター発表コアタイム (A会場: 3階第一会議室)

大学博物館等協議会 館長・日本博物科学会 理事 会議 (B会場: 3階10番講義室)

<< ポスター発表 >>

- 新井 竜治¹・三島 美佐子¹・古賀 信也²・岩元 真明³

(¹九州大学総合研究博物館、²九州大学農学研究院 (演習林)、³九州大学芸術工学研究院)

「九州大学歴史的什器コレクションにおける『指標家具』選定と実測による資料化」

- 佐藤 琴¹・小幡 圭祐¹・堀井 洋²・小川 歩美²・榎本 千賀子³・櫻澤 孝佑⁴

(¹山形大学博物館、²合同会社AMANE、³新潟大学、⁴OKUMock)

「デジタルアーカイブの公開にかかる課題 (著作権法等)」

- 二宮 聡・三島 美佐子・伊藤 泰弘 (九州大学総合研究博物館)

「地域と繋がる大学博物館: 文化庁InnovateMUSEUM事業報告」

16:10-16:20 休憩 (10分)

16:20 大学博物館等協議会 総会・日本博物科学会 総会 (A会場: 3階第一会議室)

16:50 懇親会アナウンス・散会

18:30-20:00 懇親会

会場: ごちそうダイニング ななつの花 (お店のQRコード →)



福岡県福岡市博多区博多駅前2-2-11 JR九州ホテル ブラッサム博多中央 1F

<https://budounoki.co.jp/lp/nanatsu-no-hana/>

※受付で懇親会の詳細を記載したものを参加者にお渡しします。

※1日目散会後から懇親会までの間にホテルのチェックインの時間を設けています。

【2日目：6月20日（金） 日本博物科学会 口頭発表】

<< 口頭発表 午前の部 >>

9:00 受付開始（九州大学箱崎サテライト・旧工学部本館 入口）

9:30 口頭発表・午前の部開始（A会場：3階第一会議室）

- 9:30 熊澤 弘（東京藝術大学大学美術館）
「東京美術学校時代の東アジア留学生が残した『卒業制作』の現状」
 - 9:45 八木 浩司¹・押野 美雪²・相場 大佑¹・村宮 悠介¹・佐藤 琴²
(¹公財)深田地質研究所、²山形大学附属博物館)
「山形大学附属博物館における企画展『アンモナイトの世界 ―深田地質研究所コレクションより―』について」
 - 10:00 藤澤 敦¹・加藤 諭²
(¹東北大学総合学術博物館、²東北大学史料館)
「博物館の防災対策の現状と課題」
 - 10:15–10:30 休憩（15分）
 - 10:30 塩瀬 隆之（京都大学総合博物館）
「博物館展示論におけるモードB鑑賞（学芸員／展示デザインの視点）の共有」
 - 10:45 上田 裕尋（東京農工大学科学博物館）
「自然史標本の歴史的価値と最新研究の両立：海外大学博物館の事例」
 - 11:00 吉朝 開¹・相良 帆乃花¹・鎌田 沙希¹・原田 一学¹・野崎 このは¹・下井田 萌¹・新井 隆信¹・佐賀 叶愛¹・土山 壮大¹・野田 みずき¹・楨原 咲月¹・黒島 健介²
(¹HUMs広島大学総合博物館学生スタッフ、²広島大学総合博物館)
「学生主体の博物館活動とその発展～展示の広がり～と今後の課題～」
 - 11:15 齊藤 有里加¹・上田 裕尋¹・金子 敬一²・高橋 美貴³・横山 岳³・伊藤 克彦³・中澤 靖元²
(¹東京農工大学科学博物館・²東京農工大学工学部・³東京農工大学農学部)
「大学博物館がつなぐ蚕糸学150年の遺産―歴史資源の再評価と新たな教育的活用」
- 11:30–13:00 昼食（学外）・ポスター発表コアタイム（12:30より）

※ 昼食は両日も近隣飲食店が利用可能（別途情報あり）です。コンビニも付近にあります。

<< 口頭発表 午後の部 >>

13:00 研究発表・午後の部開始 (A会場: 3階第一会議室)

- 13:00 中村 剛之 (弘前大学資料館/白神自然環境研究センター)
「環境教育と標本資料収集の取り組みとしての白神バイオブリッツ」
- 13:15 五木田 まきは・黒川 廣子・大内 伸輔・曾田 めぐみ・岡崎 未樹
(東京藝術大学大学美術館)
「東京藝術大学大学美術館における新たな教育普及活動の取り組みについて」
- 13:30 梅村 綾子¹・緒方 泉²
(¹名古屋大学博物館、²九州産業大学)
「知と癒しをつなぐ大学博物館—心の保健室をめざして」

13:45-14:00 休憩 (15分)

- 14:00 吉田 周平 (九州大学統合新領域学府)
「大学博物館における包摂的支援の実態と可能性: ADHD特性への対応をめぐって」
- 14:15 吉田 明世 (九州大学総合研究博物館・フジイギャラリー)
「九州大学フジイギャラリーにおける展示企画の実践」
- 14:30 石丸 恵利子¹・会下 和宏²・川島 尚宗¹・田畑 直彦³・福永 将大⁴・松永 篤知⁵・横山 成己³・吉田 広⁶・若林 邦彦⁷
(¹広島大学総合博物館、²島根大学総合博物館、³山口大学埋蔵文化財資料館、⁴九州大学総合研究博物館、⁵金沢大学資料館、⁶愛媛大学ミュージアム、⁷同志社大学歴史資料館)
「大学博物館と大学構内埋蔵文化財調査組織」
- 14:45 田中 圭子・金子 智美・黒川 廣子 (東京藝術大学大学美術館)
「『生活芸術』をめぐる多領域資料の整理と活用: 斎藤佳三関係資料アーカイブ構築の試み」

15:00 おわりのあいさつ (館長) ・バックヤードツアー案内

<< バックヤードツアー >>

15:10-16:30

九州大学博物館・箱崎キャンパス バックヤードツアー

(正門 → 第一庁舎 → 旧工学部本館内)

16:45 散会

※ バックヤードツアーは4班(各班15名前後)に分かれてまわります。

日本博物科学会 研究発表について

【1】口頭発表

発表時間は10分、質疑応答3分、発表者交代2分の予定です。

〈注意事項〉

- ・口頭発表は、コンピュータ接続の液晶プロジェクタを使用し、PowerPointにて行います。会場ではWindowsパソコンを用意しますが、念のため、ご自身のノートPCもご持参ください。
- ・発表ファイルはUSBメモリに保存し、当日ご持参ください。事前にウイルスチェックを済ませておいてください。
- ・PowerPoint for Macをご使用の場合、フォントや図の表示に不具合が生じる可能性があるため、ノートPCと接続用コネクタをご持参のうえ、そちらをご使用ください。

【2】ポスター発表

- ・研究発表ポスターは、A0サイズ1枚以内で印刷したものをご持参ください。
- ・ポスター発表のコアタイムは、6月19日(木) 15:50-16:10、および6月20日(金) 12:30-13:00とします。
- ・6月19日(木)のコアタイムにおいては、1題につき1分間のライトニングトークを予定しています。
- ・6月20日(金)のバックヤードツアー開始前までに、ポスターを各自で撤去してください。残されたポスターは開催校にて廃棄処分いたしますので、ご了承ください。

第28回大学博物館等協議会・第20回日本博物科学会

発表要旨集

シンポジウム (p. 9～)

ポスター (p. 11～)

口頭発表 (p. 13～)

※加盟館以外の発表者の所属を明らかにするために一律で住所を掲載しています。

(発表者多数の場合は割愛しています。)

シンポジウム「大学博物館収蔵再考—新たな段階にむけて—」開催趣旨

三島美佐子 (本シンポジウム ファシリテーター)

福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学総合研究博物館

博物館において収蔵と持続運営は喫緊の課題である¹⁾。われわれ大学博物館においてはとくに、設置当初から現在に至るまで、ほとんどの館において収蔵に関連する問題が続いている。さらに近年は、収蔵面積あたりの使用料が加算される仕組みが一般化しており、困難さは増すばかりである。本シンポジウムでは、収蔵に関連する面積・人員・資金等が不足していることを前提として、建設的アプローチの具体例について検討したい。いくつかの館から、具体的にどう対応しているのか／してきたのか、という事例を共有いただき、それらをもとに、大学博物館における今後の解決策の方向性、資料の保管と収集の今後のあり方などに関しても議論を深めたい。

¹⁾ここ2年の間でも、以下のような博物館収蔵に関わる重要なシンポジウムが開催されている：

2024年2月20日 「生物標本の収蔵問題を考える～国内の先進事例を参考に～」主催：全日本博物館学会

2024年5月25日 「博物館の収蔵コレクションの現状と課題を考える」主催：法政大学資格課程

2025年3月 8日 「博物館収蔵コレクションの新たな価値創造—公開・活用の可能性を探る—」主催：法政大学資格課程

2025年3月16日 「大学が博物館を持つ意義—大学における付属博物館の役割を改めて考える—」主催：全日本博物館学会ほか

【1日目 シンポジウム】

収蔵学術標本 —理想と現実—

伊藤 泰弘

福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学総合研究博物館

九州大学は2018年に伊都キャンパスへ完全移転したが、総合研究博物館は標本資料と共に旧箱崎キャンパス（現・箱崎サテライト）の旧工学部本館に残された。移転の際には、収蔵資料の博物館への移管が滞り、標本散逸の危機も報じられたが、旧工学部本館が国の登録有形文化財となり、同地で博物館活動を継続することとなった。移転前には、学内標本資料のデータベース化が進められ、博物館への集約や一元管理が目指された。しかし、標本資料の移管が円滑に進まず、整備状況が悪化してしまった。今後は、既存データベースと実物を照合しながら標本資料を再整備する必要がある。一方、伊都キャンパスに新たな収蔵庫（伊都標本資料研究・教育ブランチ）が完成したことは一筋の光明である。これまで旧工学部本館で標本資料があふれ整理が困難であったが、新収蔵庫により計画的な整備が可能となった。ただし、この作業のための専門人材と経費が不足している上、大きな収蔵庫があっても計画的な収蔵と収納棚の整備がなければスペースを無駄にする。これらの課題は最終的に費用に行き着く可能性が高いが、標本資料の整備に限らず、あらゆる面で取捨選択が求められるであろう。

【1日目 シンポジウム】

博物館標本の分散収蔵とデジタルアーカイブ

佐々木猛智

東京都文京区本郷7-3-1 東京大学総合研究博物館

収蔵スペースの狭隘化は全ての大学博物館に共通の課題である。研究活動が続く限り標本は増え続け、収蔵可能面積は減少し続けるが、予算が増えることは滅多にない。そこで、打開策のひとつとして紹介するのは分散収蔵という考え方である。東京大学総合研究博物館では展示室を都内3箇所(本館、インターメディアテク、小石川分館)に分散している他、茨城県笠間市、福島県楡葉町の2箇所に収蔵庫を設置し、今後も学外での収蔵空間の獲得を目指している。特に、楡葉町では、博物館は町から収蔵設備の提供受け狭隘化解消の恩恵を受ける一方、博物館は町の展示施設の更新や講演会の開催を通じて町の文化復興に貢献し、極めて建設的な関係を築いている。全てを手許に置いておきたいという理想は捨てて、使用頻度や重要度に応じて収蔵場所を選択し、標本活用の最適化を目指す方式である。標本を分散させる場合に注意すべき点は、設置場所を正確に把握することであるが、遠隔地に置く標本の管理は簡易な電子化によって効率化を図ることができる。タイプ標本や出版証拠標本のよう重要性の高い標本は本拠地に置き、詳細なデジタルアーカイブを構築することが推奨される。

【1日目 シンポジウム】

収蔵標本の資源化

小林 快次

北海道札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学総合博物館

大学博物館に収蔵される標本・資料は、研究・教育・社会貢献を支える基盤資産である。北海道大学総合博物館には300万点を超える多様な標本が保管されているが、真に「資源」として活用するには、収蔵体制、利活用戦略、収集方針の見直しが必要である。第一の課題は、収蔵体制の限界である。スペースや人員、予算が不足し、標本が床や廊下にまであふれる状況となっている。昆虫や脊椎動物の標本では、保存環境の不備やボランティア依存が課題となっており、全国的な体制整備が急務である。第二の課題は、標本の活用方法である。北海道大学では、DXを活用し、バーチャル展示や標本データのオンライン公開を進めており、SDGsとの関連も明示することで社会発信力を強化している。第三の課題は、収集方針の再考である。スペースに限りがある中で、「すべてを集める」方針を続けるか、「選び、残す」方向に転換するかが問われているが、過去には一見価値がなかった標本が後に重要な研究資源となった例も多く、グレーディング制度の導入が提案されている。これらの課題に対応し、大学博物館は知的インフラとして多面的な資源化を進める必要がある。

【1日目 シンポジウム】

博物館の収蔵問題に関する国際的動向と大学博物館の役割

栗原 祐司

東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館

博物館の収蔵庫問題は、コレクションの保存管理や防災・防犯、アクセシビリティ等の観点やその在り方を含め、世界的に議論されるようになってきている。ICOMでは、2021年に機関誌で Museum Collection Storage について特集を組み、翌2022年に Working Group on Collections in Storage (WGCS) が発足、今年収蔵庫コレクション国際委員会 (International Committee on Collections in Storage) が設立された。

本発表では、同WGが2023年に実施したアンケート調査をもとに2024年5月にまとめられた報告書の概要を説明するとともに、欧米の大規模博物館で作品の「民主化 (democratization)」と呼ぶ「見せる収蔵庫 (Show storage)」を建築するようになってきている傾向や、ICOMで議論されている博物館政策の一環としての収蔵庫問題について概説する。また、大学博物館は、「標本・資料のセーフティネット」としての役割もあると思われ、先人から継承されてきた貴重な文化遺産を後世に守り伝えるためにも、早急に収蔵庫問題に取り組む必要があり、災害時や地域の個人博物館等が閉館した際の収蔵スペースとして大学博物館の果たす役割についての必要性についても提言する。

【1日目・2日目 ポスター】

九州大学歴史的什器コレクションにおける「指標家具」選定と実測による資料化

新井 竜治¹⁾・三島 美佐子¹⁾・古賀 信也²⁾・岩元 真明³⁾

¹⁾ 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学総合研究博物館

²⁾ 福岡県糟屋郡篠栗町津波黒394 九州大学大学院農学研究院環境農学部門(演習林)

³⁾ 福岡県福岡市南区塩原4-9-1 九州大学大学院芸術工学研究院環境設計部門

九大博物館が所蔵する歴史的什器（以下「九大什器」）コレクションは、2005～19年の大規模キャンパス移転や建物建替の際に、九大博物館が収集・研究資料化したものであり、総数2,000点を超え、木製家具等を中心に構成されている。現在の九大各学部設立時（医1903年；工1911年；農1919年；法文1924年；理1939年）以降順次購入され、第二次世界大戦の福岡大空襲も免れ、戦後も使用され続けてきたものの一部であり、近代日本家具の意匠・技術とその変遷の情報を直接得ることができる第一級の歴史資料である。近年国外では、戦時下に開発製造された「実用家具」の歴史研究が進みつつある。戦時下日本の「実用家具」研究は着手されておらず、その特性を明らかにするうえで、まずはこの時代の指標となる家具の基準を定め、九大什器コレクションから「指標家具」を選定することとした。結果として、『日本事務用卓子及椅子単純化規格』（1934年）および『洋家具類銘柄参考図集』（1943年）を元に、片袖机(7台)、両袖机(3台)、書棚(11台)、大卓子(4台)の計25台を選定し、指標家具として撮影・実測・CAD製図により資料化したので報告する。

【1日目・2日目 ポスター】

デジタルアーカイブの公開にかかる課題（著作権法等）

佐藤 琴¹⁾・小幡 圭祐¹⁾・堀井 洋²⁾・小川 歩美²⁾・榎本千賀子³⁾・櫻澤 孝佑^{2) 4)}

¹⁾ 山形県山形市小白川町1-4-12 山形大学附属博物館・²⁾ 石川県金沢市大額2-44 N3ビル203 合同会社

AMANE・³⁾ 新潟県新潟市西区五十嵐2の町8050 新潟大学・⁴⁾ 福島県大沼郡三島町宮下米子沢1948-1

OKUMock

2023年の改正博物館法に博物館の事業として収蔵資料のデジタルアーカイブ公開が明記された。文化庁のInnovate MUSEUM事業にも1番目に「博物館収蔵資料デジタルアーカイブ事業」が掲げられ、各博物館で進行しつつあるが、一方で課題も多い。その要因の一つが疑似著作権（理論的に権利が存在しないが、著作権があるとの誤解）や、ネット上で公開することによって生じる不適切な利用への危惧であると中尾智行（文化庁博物館支援調査官）は指摘している。この課題に対して我々は著作権法とその運用の実態を学ぶべきと考え、各自が運用する公開サイト等の利用規約の策定にあたり、弁護士のリーガルチェックを受けた。この過程で得られた知見を報告する。

【1日目・2日目 ポスター】

地域と繋がる大学博物館：文化庁InnovateMUSEUM事業報告

二宮 聡・三島 美佐子・伊藤 泰弘

福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学総合研究博物館

当館は2021年度より、文化庁による博物館機能強化事業を機に、本学開学の地「箱崎」（福岡市東区）をモデルとして、まちとミュージアムをテーマとした「地域共創協学ミュージアム基盤整備事業」に取り組んでいる。2023年度には、ボランティアなプロジェクト参画者である「まちの学芸員」という枠組みを設け、実践を通し検討・考察してきた。本事業では、本学学生の参画はもとより、公民館や有志団体など地域のステークホルダーや、地元のアーティストやデザイナーなど、多様な主体との連携を進めた。実際にまちを歩くなどフィジカルな側面と、デジタルアーカイブ作成などのデジタルの側面、両面の実践からの今後の可能性の萌芽を見ることができた。本学のキャンパス移転完了後、跡地再開発に伴い大きく変化しつつあるこの箱崎の地で、メインキャンパスから離れて位置する当館が、どのように地域と関わることができるのか。特にこの2ヵ年の実践とその意義について報告する。

【2日目 口頭発表 9:30】

東京美術学校時代の東アジア留学生が残した「卒業制作」の現状
—東京藝術大学大学美術館所蔵の自画像・卒業制作を中心に—

熊澤 弘

東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学大学美術館

東京藝術大学大学美術館の所蔵品のなかで重要な位置を占めるコレクションに、東京美術学校以来の歴代の学生作品（卒業制作、自画像）がある。1893年から現在まで収集され続けている学生作品の数は1万件を超えており、このコレクションは総体として、本学の教育研究の変遷、ひいては日本近現代美術教育史の発展を辿ることができる「アーカイブ」としての重要性を持っている。

これらの学生作品で近年、学内外から際立って注目されているのが、東京美術学校時代の東アジア（中国本土、朝鮮半島、台湾）からの留学生による卒業制作・自画像である。本稿では、これらの留学生による作品の概要を近年の動向とともに紹介し、学内外での活用状況——調査研究および国内外での展覧会事業——の傾向を考察する。

【2日目 口頭発表 9:45】

山形大学附属博物館における企画展

アンモナイトの世界 --深田地質研究所コレクションより-- について

八木 浩司¹⁾・押野 美雪²⁾・相場 大佑¹⁾・村宮 悠介¹⁾・佐藤 琴²⁾

¹⁾ 東京都文京区本駒込2-13-12 (公益財団法人) 深田地質研究所

²⁾ 山形県山形市小白川1-4-16 山形大学附属博物館

(公益財団法人)深田地質研究所（以下深田研）は日本で唯一の民間地質学研究所であるが、所属研究者所蔵分も含めると500点以上のアンモナイト化石標本が所蔵されている。

2024年夏に山形大附属博物館(以下山大博物館)において深田研所蔵のアンモナイト化石を主体とした企画展を開催することとなった。展示は、古生物研究とアンモナイト類の進化過程を紹介する趣旨から以下の3つの大テーマに沿ったものとなった。すなわち「化石から知るアンモナイトの世界」、「アンモナイト約3億年進化の歴史」、「どこにすんで・どんなすがたで・どんな生き物? アンモナイトの謎」である。それぞれのテーマに対応した標本がまとめられ解説パネル図案も作成された。同時に、深田研研究者による講演会「アンモナイトのすべて」とアンモナイトレプリカ作り体験(計3回)を実施した。2024年の企画展実施に向けてまとめられたアンモナイト化石標本群は、現在深田研・研修ホールに展示パネルと共に展示され来訪者を楽しませている。またそれらは、セットとなってまとめられていることから申し出があれば他館への貸し出しも可能な状況にある。

【2日目 口頭発表 10:00】

博物館の防災対策の現状と課題

藤澤 敦¹⁾・加藤 諭²⁾¹⁾ 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3 東北大学総合学術博物館²⁾ 宮城県仙台市青葉区片平二丁目 1-1 東北大学史料館

東北大学学術資源研究公開センターは、「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」の東北大学拠点に参加し、同事業を推進してきた。その一環として、センターの構成機関である総合学術博物館と史料館が協力して、博物館・資料館や収蔵施設の防災対策について、2022～2024年度の3ヶ年にわたって、アンケート調査を実施した。北海道・東北・関東地方の東日本の博物館等を対象に、ハザードマップなどで明らかとなった災害リスクに対して、どのような対策が取られているかを中心に調査を実施した。マニュアルの作成や訓練の実施といった対策が行われている館がある一方、他機関との連携不足や人員不足などが共通の課題として挙げられるなどの実態が明らかとなっている。このような調査結果をもとに、博物館等の防災対策の現状と課題について報告する。

【2日目 口頭発表 10:30】

博物館展示論におけるモードB鑑賞（学芸員／展示デザインの視点）の共有

塩瀬 隆之

京都府京都市左京区吉田本町 京都大学総合博物館

博物館展示論は、学芸員資格取得の必須科目の一つであり、来館者と博物館がコミュニケーションする最前線に関する技法、理論を学ぶ機会である。京都大学総合博物館では、大学博物館内の講演室ならびに企画展示室を講義場所とできる強みを生かし、当該年度に企画されている企画展や特別展の準備過程に沿って、企画から広報、展示レイアウト、キャプションの書き方に至るまで、具体的な展示を事例に体験的に学ぶ機会を提供している。また担当者の研究テーマから、インクルーシブな観衆への配慮、映像展示から生成AIを活用した展示計画など、最先端技術の活用についても紹介している。

2025年度は、とくに万博開催期間ということもあり、万博会場の各国パビリオンの展示デザインにおいて、動線、照明、温湿度管理、キャプション、フォント、映像展示、配線の始末、造作壁等に注視しながら鑑賞する「モードB鑑賞」を講義で紹介し、展示があらゆるジレンマにはさまれた決断の連続であること、必ずしも予算が潤沢にあるわけではないとき、どこで始末をつけるかに各国パビリオン展示担当者の矜持があらわれている点に注目した鑑賞法を紹介する。

【2日目 口頭発表 10:45】

自然史標本の歴史的価値と最新研究の両立：海外大学博物館の事例

上田 裕尋¹⁾¹⁾ 東京都小金井市中町2-24-16 東京農工大学科学博物館

イエール大学附属ピーボディ博物館(YPM)は2020年から2024年にかけて大規模なリニューアルを実施した。この改修でYPMは、旧来の標本や展示の課題を踏まえつつ、それらを更新・活用して、最新の研究教育資源として再構成した。特にYPMは恐竜研究において大きな歴史的意義を持つ大学博物館で、古い保存・展示手法には歴史的価値を生じているものが多い。これらの歴史的価値を保存しつつ、新たな教育研究利用に向けた改修について、実際に現地訪問し、見学聞き取り調査を行った。かつての博物館展示手法等を残すために、すべての標本を可能な限り様々な方向から撮影していた。また、展示改装に伴う各標本の改変過程をGoogleスライドに記録・共有していた。かつてのYPMには館内に教室がなかったが、今回の改修で複数の教室を館内に設置し、また隣接する大学施設と地下通路でつなげることで学内教育利用促進を図っていた。今後は得られた知見をもとに、国内大学博物館における展示・教育・研究環境の充実に向けた応用可能性を探っていきたい。本調査は、カメイ社会教育振興財団及び全国科学博物館協議会の助成を受けて行った。

【2日目 口頭発表 11:00】

学生主体の博物館活動とその発展 ～展示の広がりと今後の課題～

○吉朝 開¹⁾・相良帆乃花¹⁾・鎌田 沙希¹⁾・原田 一学¹⁾・野崎このは¹⁾・下井田 萌¹⁾・新井 隆信¹⁾・佐賀 叶愛¹⁾・土山 壮大¹⁾・野田みずき¹⁾・楨原 咲月¹⁾・黒島 健介²⁾

¹⁾ 広島県東広島市鏡山1-1-1 HUMs 広島大学総合博物館学生スタッフ²⁾ 広島県東広島市鏡山1-1-1 広島大学総合博物館

広島大学総合博物館学生スタッフ(HUMs)は、2018年度から学生主体で企画展の企画・運営を行っている。昨年度は「広大なキャンパスをのぞいてみよう展」を開催し、広島大学総合博物館および東広島市立美術館にて展示を実施した。加えて、2回のイベントとスタンプラリー、図録の作成も行った。昨年度はこれまでと違い、新規メンバーの加入が多く、文系・理系双方の学生が在籍していた。これにより、多様な視点からの展示が実現した。今回の展示では、通常の展示に加え、限られた予算の中で工夫を凝らし、3Dプリンターや小型プロジェクターを使用した、来館者が直接体験できるハンズオン展示を導入した。これらの取り組みを通じて、メンバーの展示制作力の向上が見られたほか、それぞれの専門性や得意分野を活かした展示となった。一方で、課題も明らかとなっており、それらについて報告する。あわせて、現在実施中の企画展についても紹介する。

【2日目 口頭発表 11:15】

大学博物館がつなぐ蚕糸学150年の遺産—歴史資源の再評価と新たな教育的活用

齊藤有里加¹⁾・上田 裕尋¹⁾・金子 敬一²⁾・高橋 美貴³⁾・横山 岳³⁾・伊藤 克彦³⁾・中澤 靖元²⁾

1) 東京都小金井市中町2-24-16 東京農工大学科学博物館

2) 東京都小金井市中町2-24-16 東京農工大学工学部

3) 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学農学部

東京農工大学は2024年に蚕糸学研究150周年を迎えた。蚕糸学は日本の近代化に貢献した重要な研究分野であったが、直接的な学科は現在国内に存在しない。しかし、その研究内容は新たな分野との融合を経て進化し続けている。本発表では、大学博物館がこの歴史資源を未来につなげる意義を明らかにし、学生が主体的に参加する科学コミュニケーション企画や桑畑復活を通じた持続可能な教育活動、歴史的掛図を用いた展示活動を具体例として紹介する。また企画展「女子蚕糸業教育-学理を学ぶ-」*を通じ、ジェンダーや科学教育の視点から蚕糸学の歴史を再評価するとともに、学内のカイコやシルクを用いた最先端研究の展示チャレンジを紹介し、蚕糸学の新たな価値創造の可能性を示す。これらの取り組みを通じ、大学博物館が持つ多面的で未来志向の教育的役割を議論する。*本展示は2021年度倉田奨励金（受領番号1519）の研究成果を基に実施した。

【2日目 口頭発表 13:00】

環境教育と標本資料収集の取り組みとしての白神バイオブリッツ

中村 剛之

青森県弘前市文京町1 弘前大学資料館／白神自然環境研究センター

バイオブリッツ（BioBlitz）は、単なる自然観察とは異なり、一般の市民と生物の専門家が協働して一定の地域の生物相を24時間かけて集中的に調査するアメリカ発祥の自然体験イベントである。日本国内では馴染みが薄いですが、欧米を中心に20カ国以上で行われている。弘前大学では白神山地が世界自然遺産登録30周年を迎えた2023年から「白神バイオブリッツ」の取り組みを開催した。学外から招待した研究者の他、市民研究家（愛好家）、弘前大学教職員、学生らからなるスタッフ、全国から集まった一般参加者の総勢100名を超える規模で実施し、野外での調査だけでなく、室内で分類同定、標本作成などを同時並行で行う。毎回、1,000種を超える動植物が確認され、捕獲・採取が可能なものは標本化し、調査結果は報告書として出版される。バイオブリッツを通じて、一般の参加者は専門家による調査の様子を見、自ら地域の自然を調べる楽しみを体験することができ、地域の市民研究家には交流と活躍の場を提供することができる。生物多様性の調査、標本資料の収集と同時に、自然史に関心を持つ人材の育成につながる活動である。ここでは、これまで2回開催した白神バイオブリッツの様子と期待される効果について述べる。

【2日目 口頭発表 13:15】

東京藝術大学大学美術館における新たな教育普及活動の取り組みについて

五木田まきは¹⁾・黒川 廣子¹⁾・大内 伸輔¹⁾・曾田 めぐみ¹⁾・岡崎 未樹¹⁾

¹⁾ 東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学大学美術館

茨城県取手市小文間 5000 東京藝術大学大学美術館取手館

東京藝術大学大学美術館では、近年の新たな取り組みとして、コレクションを活用した学外向けの教育普及活動を展開し始めている。所蔵作品にかかわる従来活動としては、展覧会の開催はもちろんのこと、学内の授業閲覧や学内外の研究者に対する調査協力、あるいは、他館への貸し出しが主であった。しかし、博物館法やICOM博物館定義の改正に代表されるように、美術館・博物館の役割における地域社会との連携の重要度は高まっている。本発表では、近年当館が実施している次の3つの教育普及活動を紹介する。①東京都美術館と東京藝術大学が取り組む、シニア世代を対象とした「Creative Aging ずっとび」における認知症の人とその家族をに対する対話型鑑賞会。②秋田県内の児童生徒を対象とした、「秋田県美術活性化アウトリーチ事業」。③茨城県・取手キャンパスに新しく建てられた、取手収蔵棟における「魅せる収蔵庫」ガイドツアー。これらの活動を通し、コレクションの魅力を広く発信するとともに、地域に開かれたミュージアムを目指す当館の取り組みを報告する。

【2日目 口頭発表 13:30】

知と癒しをつなぐ大学博物館—心の保健室をめざして

○梅村 綾子¹⁾・緒方 泉²⁾

¹⁾ 愛知県名古屋市千種区不老町 名古屋大学博物館

²⁾ 福岡県福岡市東区松香台2丁目3-1 九州産業大学

名古屋大学博物館は、学生運営スタッフ団体MusaForumと協働してイベント等を展開する一方で、学生自身の心身の健康支援も博物館活動の一環と位置づけ、大学博物館の「心の保健室」的機能の実現に取り組んでいる。九州産業大学の緒方泉特任教授が主導する「博物館浴[®]」の実証実験（2023年5月6日、名古屋大学博物館）では、博物館見学が若者のストレス軽減や気分改善に寄与することが示された。これを受け館内に自己測定用の血圧・脈拍測定器を設置し、博物館浴[®]に関する情報を発信したところ、2024年3月25日から10月18日のアンケート結果から、さまざまな来館者が高い関心を示したことが明らかとなった。また、来館時に「暑い」「眠い」「疲れた」といった反応を示した人々が、退館時には「楽しい」「リラックスできた」といった肯定的な感想を述べ、心理的なリフレッシュ効果も確認された。このことから、博物館は知識や文化を提供するだけでなく、心の保健室として癒しや支えの役割も担う場として、意識的に取り組む重要性が示唆される。

【2日目 口頭発表 14:00】

大学博物館における包摂的支援の実態と可能性：ADHD特性への対応をめぐって

吉田 周平

福岡県福岡市西区元岡744 九州大学大学院 統合新領域学府 ユーザー感性スタディーズ専攻 博士後期課程

近年、博物館は「誰でも楽しめる」ことを重視しているが、発達障害、特にADHD（注意欠如・多動症）への配慮は国内ではほとんど進んでいない。社会教育施設と大学内の教育・研究活動を支える基盤施設の二面性を持つ大学博物館（西野、1996）にとっても、同じく求められている（佐々木・吉住、2014）。そこで本発表は、ADHD特性を持つ来館者に対し、大学博物館ではどのような施策・工夫が行われているのかを把握することを目的とする。筆者は修士研究において、ADHD特性をもつ来館者5名への聞き取り調査を行い、発話を「博物館の要素」「協力者の感情」「実行機能の各特性との関連」の3軸でラベリング・分析した。そこでは、ADHD特性を持つ来館者の博物館体験をより豊かにする具体的な施策として、音量調節可能なヘッドホンやフィジェット・トイの貸し出しなどが挙げられた。本発表ではこの知見を基盤に、大学博物館の特性に注目しつつ、現状取り組まれている包摂的支援の実態を実行機能との関連から整理・検討する。支援の目的やアプローチに基づいて施策を4象限に分類し、大学博物館における包摂性実現に向けた具体的な道筋を探る。

【2日目 口頭発表 14:15】

九州大学フジイギャラリーにおける展示企画の実践

吉田 明世

福岡市西区元岡744フジイギャラリー 九州大学総合研究博物館

九州大学フジイギャラリーは、2022年5月にサイエンス&アートの展示や企画を実施するギャラリーとしてグランドオープンした。人が集うギャラリー1と展示に適したギャラリー2からなる。当ギャラリーのコンセプトは『触発を促しその創造性を育む「発想する空間」』であり、展示を見に来るだけの場ではなく、展示・企画を通して参加することできる場の創出を目標としている。それと同時に九州大学の「Kyushu University VISION 2030」が掲げるシチズンサイエンスの促進や研究の「みえる化」をふまえ、学内の研究者のアウトリーチ活動を促進し、市民との接点になれるよう多くのイベントを企画してきた。本発表では、2023年度春季企画展示「元寇防塁研究と九州大学」と、2024年度企画展示「弥生時代の人々 — 九州大学の自然人類学研究 —」の2つを取り上げ、会期中に開催したイベントを中心に紹介する。

【2日目 口頭発表 14:30】

大学博物館と大学構内埋蔵文化財調査組織

石丸恵利子¹⁾・会下 和宏²⁾・川島 尚宗¹⁾・田畑 直彦³⁾・福永 将大⁴⁾・松永 篤知⁵⁾・横山 成己³⁾・○吉田 広⁶⁾・若林 邦彦⁷⁾

¹⁾ 広島大学総合博物館・²⁾ 島根大学総合博物館・³⁾ 山口大学埋蔵文化財資料館・⁴⁾ 九州大学総合研究博物館・⁵⁾ 金沢大学資料館・⁶⁾ 愛媛大学ミュージアム・⁷⁾ 同志社大学歴史資料館

大学博物館と同じく、各大学の判断による多様な設置運営形態の学内組織の一つが、大学構内埋蔵文化財調査組織（以下、大学埋文）である。大学が所在自治体に届け出て原因者として費用を負担する大学構内の事前調査を、自ら行うため学内に設置したのが大学埋文である。国立15大学・私立1大学で現在機能している。大学博物館との関係は、館自体が大学埋文の任を担う大学、人員が兼任の大学もあれば、別組織の場合も少なくない。考古系教員ポストの確保を通じて、研究教育の充実を支えてきたが、大学埋文縮小の動きもみられる。九州大学では2026年度から大学埋文を廃して資料を大学博物館が継承する。大学埋文資料は遺失物法の手続きを経て出土文化財と認定され、明確な形で大学保管となった資料である。別組織であっても、大学埋文資料が大学保管資料として活用が求められ図られていくとき、組織そして場として、大学博物館も等閑視はできない。限られた人材が共同できる範囲を拡げていくことも、大学博物館と大学埋文双方のプラスになるはずである。

【2日目 口頭発表 14:15】

「生活芸術」をめぐる多領域資料の整理と活用：斎藤佳三関係資料アーカイブ構築の試み

田中 圭子・金子 智美・黒川 廣子

東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学大学美術館

斎藤佳三（1887-1955）は20世紀初頭のドイツでモダニズム芸術運動の最前線を体験し、日本において生活空間や身体活動と諸芸術の統合をめざす「生活芸術」を提唱し、美術、商業図案、音楽、演劇、映画、服飾といった複数分野にまたがる実践を行った。また、東京美術学校や華民国国立芸術院で教鞭をとる一方、自ら装飾美術研究所や服飾創作学院を設立するなど、教育者としても大きな足跡を残している。しかし、その国際的かつ領域横断的な活動ゆえに、斎藤の業績とその社会的影響を包括的に捉える研究はこれまで十分に進展してこなかった。東京藝術大学が所蔵する約3000件におよぶ斎藤の作品および個人資料群の調査は昭和60年代から段階的に進められてきたが、資料の多様な形状と内容の複雑さゆえに、現在も公開に向けた整理の途上にある。本発表では、それらを今後の学術研究および芸術実践に資する資源として有効活用するための方法論の検討とデータベース構築の過程、および今後の展望について論じる。また、斎藤佳三の芸術実践を再評価し、それが現代の芸術と生活の接続にどのような示唆を与えるのかを検討する。

会場案内

【九州大学箱崎サテライト】

箱崎サテライトへの出入り口は、正門または北門のみとなります。

※箱崎サテライト周辺は工事中で、近隣駅から工事区域を横断するようなショートカットができません。工事ゲートが開いていた場合でも、一般通行は禁じられており、箱崎サテライトにもたどり着けませんので、誤って立ち入らないようご注意ください。



乗りチャリ
NG



押しチャリ
OK



構内での自転車走行
できません。自転車は
駐輪所に停めて下さい。



車両入構できません。
近隣のコインパーク
をご利用ください。

※車椅子ご利用で車両入
構ご希望あれば、開催校
事務局まで事前にお知ら
せいただければ対応可能
です。

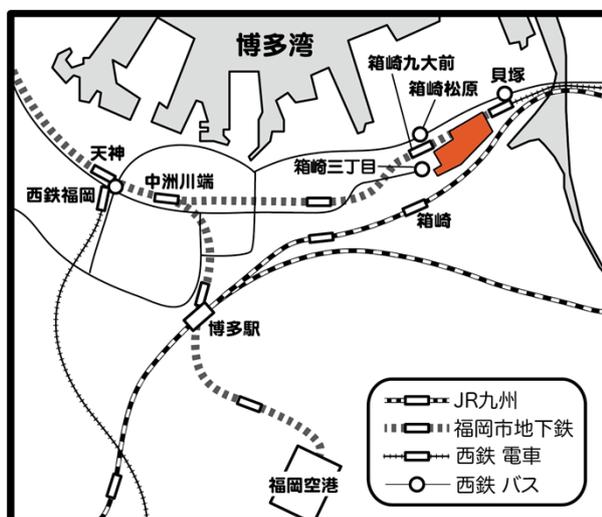


正門



北門

【アクセス】



最寄駅

- 福岡市営地下鉄「箱崎九大前」駅
2番出口から徒歩約10分
- ★福岡空港からは、「中洲川端」で
「貝塚線」に乗り換えてください。
- JR鹿児島本線「箱崎」駅
西口（筥崎宮側）から徒歩約5分
- ★JRは、各駅停車しか停まりません。
**ラッシュ時以外は本数が少ないので
ご注意ください。地下鉄利用がおすすめです。**

本学ウェブサイトのアクセスマップもご参照ください：
<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/campus/hakozaki/>

【箱崎サテライト内配置図】

学会会場建物 40-0207



旧工学部本館
1930（昭和5）年建築

九州大学は、2018年度の最終移転完了後、以下5棟の歴史的建造物を含む保存エリアを「箱崎サテライト」として保持・活用しています。残された歴史的建造物は、2023年および2024年（正門）に、本学初となる国登録有形文化財になりました。

- 40-0207 旧九州帝国大学工学部本館
- 40-0208 旧九州帝国大学本部事務室棟
- 40-0209 旧九州帝国大学本部建築課棟
- 40-0210 旧九州帝国大学門衛所
- 40-0225 旧九州帝国大学正門及び塀

40-0210



正門門衛所
1914（大正3年）建築

40-0225



正門
1914（大正3）年建築

40-0209



本部第三庁舎
1925（大正14）年建築

40-0208



本部第一庁舎
1925（大正14）年建築

地蔵の森

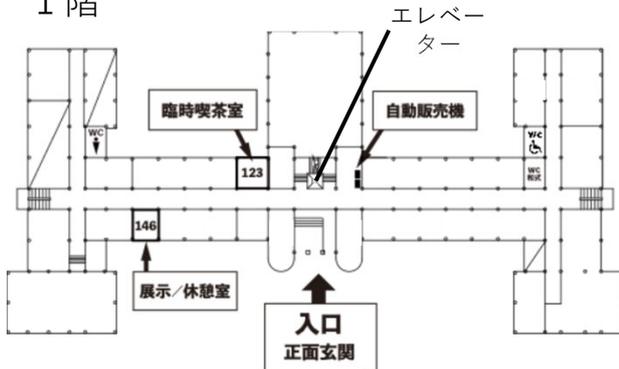
レガシー枯山水
（2024年竣工）

旧農学部門柱（移築）

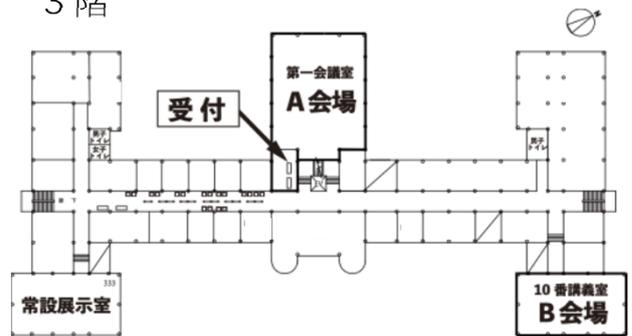
駐輪場所

【旧工学部本館内 会場配置図】

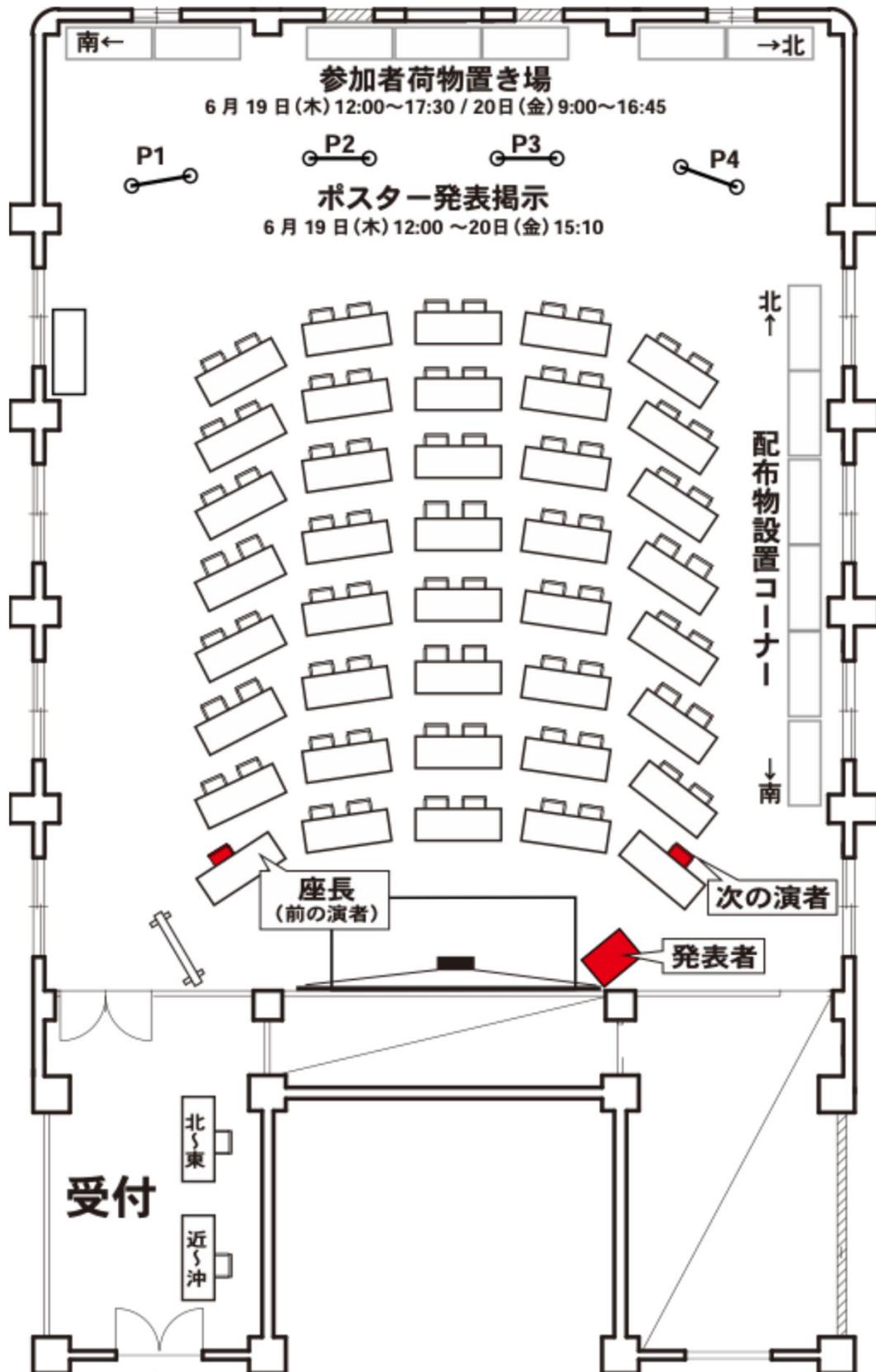
1階



3階



【A会場（旧工学部本館3階第一会議室）図】



【大学博物館等協議会・博物科学会参加者向け館内開示室等公開のご案内】

2025年6月19日12:00～17:00、20日9:00～16:00

※協議会・学会参加者以外の方のご観覧は、できません

